

Métier of clinical philosophy

臨床哲学のメチエ
臨床の知のネットワークのために
1999年 春の号

特集：教育の臨床哲学

- 子どもの現在 学校の現在 山田 潤 2
研究会の参加者より 高井るい子 21
学校教育は何のためにあるのか 寺田俊郎 22
不登校と優等生 森 芳周 26
* * *
そのキスシーンの嘘っぽさ 大北全俊 28
臨床哲学的空間 30

特集：教育の臨床哲学

第2回臨床哲学研究会より 山田潤氏講演録

子どもの現在

学校の現在

——増え続ける不登校の問いかけるもの——

1998年9月24日、第2回臨床哲学研究会（通算第13回目）では、今宮工業高等学校定時制教諭の山田潤氏をお招きしてお話を伺った。山田氏は英語科教諭として日々高校生と接するとともに、「学校に行かない子と親の会」の世話人、全国不登校新聞社の理事として、不登校の子どもたちを見つめてこられた。論文に「学校に『行かない』子どもたち——〈親の会〉が問いかけていること——」（『岩波講座現代の教育4』） 訳書に『ハマータウンの野郎ども』（ちくま学芸文庫、共訳）など。



みなさん、こんにちは。今宮工業高校の定時制課程で英語の教師をしている山田と申します。なるべく一時間でまとめるつもりですが、私の話はあちこちで破綻するだろうと思っています。首尾一貫したお話はできません。

わたしは、一方で定時制高校の教師をしながら、他方で「学校に行かない子と親の会」の世話人をやり、この5月からは「不登校新聞」の理事もやっています。この「新聞」をやろうと言い出したのは、

「東京シューレ」というフリースクールを主宰している奥地圭子さんですが、わたしは、その奥地さんから、「早く学校から足を洗いなさい。そうすれば、不登校している子やその親たちと一緒に、もっとのびのびと活動できるよ」と言われ続けています。

定時制高校の教師をやりながら、同時に、学校の外で、学校に行かない子どもやその親たちと、「学校がなんぼのもんや」という活動をしているわけです。こ

のレジメのなかに、「どこに立って、何を論じ、だれに語りかけるのか」と書きましたが、私の立っているところが、すでに大いに矛盾をはらんでいます。ですから、これからお話しすることのなかにも、あちこちで矛盾や破綻があらうと思います。みなさんから、そこを突いていただいて、どんどん議論していただければ、と思います。

さて、今日、石橋の駅からこのキャンパスまで歩いてくるとき、ここまでの道のりは本当に緑が多くて、素晴らしい環境だなと思いました。この階下の食堂もとても快適です。で、さきほども食事をしながら話したのですが、この環境のよさをうらやましいと思うと同時に、なんだか、ずいぶん不公平じゃないか、と感じてしまいます。私が日々向かい合っている定時制の生徒たちは、まずこんな所には縁がありませんね。

私が勤めている今宮工業高校は、西成区の「あいりん地区」にあります。私たちの授業が終わるのは午後9時で、クラブ活動を10時くらいまでしますから、私が環状線に乗るのは10時30分くらいです。学校のすぐそばの交差点に大きなガソリンスタンドがありまして、最近はそのコンクリートの敷地に常時50人くらいが野宿しています。天王寺公園が有料になって、そこから閉め出された人たちが、あの界限一帯でちょっとした空間を見つけては一夜を過ごすようになって

います。学校前の交差点には大きな歩道橋がありまして、その下は雨宿りするのに格好の場所だったのですが、今ではフェンスと鉄条網を張って、野宿者を閉め出しています。だから、スタンドが閉店するのを待って、スタンドのひさしの下に川の字に並んで寝ているのです。ひどい話ですね……

鶴見緑地で「花の万博」をやったときも、新今宮の駅は改装されたのですが、南海とJRの乗り換えホールだけをきれいにして、街に降りる階段は汚いままで手をつけませんでした。「今宮工高ってどこにあるんですか？」と聞かれて、「新今宮の駅から歩いて5分くらいですよ」というと、「南海とJRの乗り換えには使ったことがありますか、あの下には降りたことはありません。なんだか怖くて……」とおっしゃる方がたくさんいます。

余談が過ぎますね。何が言いたいのかと申しますと、中学校を卒業して、あるいは高校を中退して、定時制高校に来る生徒は、大多数が、それが最終学歴になります。大学というものには縁がないのです。こういう恵まれた環境にあるキャンパスに来ますと、やはり、その落差の大きさを感じてしまいます。そこでさまざまな学問研究が行われるのですが、それが定時制の生徒たちとどんなふうに関係するんだろうと考えてしまいます。

実は、明日から、某私大の非常勤で、「社会階層論」という講義を半年間するのですが、社会階層論などというのは、まさ

に社会がどのような階層をなして存在しているのかというようなことを考えるわけです。で、あとでもふれますが、私は大所高所から「社会」を俯瞰するという方法を避けたいと思っていますので、講義を受ける学生たちに、「みなさんが〈社会階層〉を意識するのはどういうときか」ということをアンケートしまして、それを素材に講義を進めるというやりかたをずっとしてきました。ともあれ、そんな講義を大学でして、この大学も瀟洒な建物が緑豊かなキャンパスに建ち並んでいるのですが、そこから新今宮に帰って定時制高校で夜の授業をする。わたし自身は、そんなところで、否応なく「社会階層」の落差を感じてしまいます。昼間働いて、夜間に学校に来る生徒たちの学びの場がどうしてこんなにみすばらしくて、だれの役に立つのかわからないような学問をしている連中が、こんな広大なキャンパスを独占して、こんな快適な場所に日々通っているというのは不公平ではないか、そんなふうに思ってしまうのです。

最初から、たいそうな話をすると思われられるかもしれませんが、自分のなかに湧きあがる、そういう抑えがたい気持ちを、私はだいじにしたいと思っています。

こういうところにうちの生徒たちを連れてきて、これも君たちの働いた税金でできた施設で、それが君たちにまったく利用できないという馬鹿な話はない、ここでいっちょバイクを乗りまわしてみるのもおもしろいんじゃないか、なんて

ことも言ってみたくなるような、なにか非常に不公平だという気持ちがあるのです。

バイクを乗りまわすというのは、大学の「利用法」としては不穏当ですが、大学や学問というものが、だれによって、だれのために「利用」されてきたかということは、やはり考えてみなければなりません。大学だとか学問だとかの権威が、だれに力を与え、だれから力を奪っているか……。そのたたくまいに、恐れおののき、縮こまってしまおうということではいけないと思うのですが、大学なり学問なりの側から、「いやそんなことではないんです」と、その「利用の落差」を解消していくのではなくて、存分に「落差」を利用して、もっといえば搾取して成り立ってきた仕組み、そこに私はむかっています。

今日のテーマである不登校に関しても、同じように、苦々しい経過があるのです。

1990年代のはじめに、文部省の不登校認識が、文言の上のことですが、大きく転換いたします。「登校拒否はどの子にも起こりうる」ということを言い始めて、ずいぶんセンセーショナルに取り上げられました。それまでは、「かくかくしかじかの子どもが不登校に陥る」、あるいは、「そういう子育てしかできなかった家庭に起こる。こういう父親が、こういう母親が、満身に学校にも行けないような子どもをつくってしまう」というような議論

を延々としていたのです。教育学者や心理学者や精神科医などといった学識者や専門家の権威を動員して。

それが、92年の、文部省の調査研究協力者会議の答申で、180度と言っていいほどの大転換をいたします。個々の子どもの「特性」や「家庭」から不登校を説明するのではなく、学校を含めた社会の総体を見ながら不登校を考え直さなくてはいけない。かならずしも子どもの責任とはいえない、むしろ、具体的に個々の子どもを調べてみると、どこにも問題はないように見える子どもでも学校に行かなくなっている。と、まあこんなくあいに、教育行政を司る中央官庁がみずから認識を大きく変えたわけです。

ところが、じゃあ、それまでさんざん言ってきたことはなんだったのか。それまで、なにを根拠に「子どもが、母親が、父親が……」と言ってきたのか、そういう反省がまるでなされていません。どういう議論の枠組みのなかでそんなことを言ってきたのか、そして、そう言い続けることによって、どれだけ学校に行かない子どもを侮辱し、そういう子どもの保護者をつらい立場に追い込んでいたか、そういう反省がひとかけらもないのです。

そういう反省がないままに、新しい答申では、民間のフリースクールのなかにも「戸塚ヨットスクール」や「風の子学園」など、放置できない妙な施設があるから、民間の居場所にガイドラインを設定するなどと言い出します。念のために

申し添えますが、教育行政や専門家たちが子どもや家庭の異常を言い募ることによって、「戸塚」や「風の子」などに子どもを収容して矯正する必要があるという風潮がつくられていたのです。つまり、自分たちが今まで何をやってきたのかということをもまったく省みずに、さらっと認識の転換、ものの考え方を改めましょうと一方で言いながら、自分たちに反省がないものだから、今度も自分たちの主導で新しい登校拒否対策を考えるということも臆面もなくやってのける。そこにまた、精神科医とか教育学者とか心理学者とかが、それらしい理屈をつけて、そういう答申なり文部省の方針なりに権威づけを与えているのです。

公害や環境破壊の問題でも、もちろん大学人や研究者のなかにも政府や企業に批判的な言動をくりひろげる人もたくさんいたけれども、大学を頂点とする学校制度は、全体として、小さい者、発言力のない者をみずからの権威で封じ込める働きをしてきたのではないか。そういうなかで、不登校の子をもつ親たちが、全国各地に自立的な「親の会」をつくって、ゆるやかなネットワークを築くに至った経過については、今年の4月に出ました岩波の「現代の教育」という講座（第4巻『いじめと不登校』）で書きました。

レジュメの下に私の略歴を記しておきましたが、「全共闘運動」の立ち上がりから、それがみずから解体していくまで、その場に居合わせたことになります。あ

のとき「帝大解体」だとか「大学解体」だとかのスローガンを謳っていましたね。ほんとうに解体すべきだったのではないかという気がします。私が大学に残らずに、町工場で働こうと思ったのも、今からふりかえると、自分も囚われていた学校だとか、学問だとかの枠組みを壊したいという願いがあったのかもしれないと思います。



ただ、今日、ここへお招きいただいたのは、よかったと感謝しています。最初は、「臨床哲学」ってなんのことかと思って、少々ためらうこともあったのですが、先日、打ち合わせにこられた栗田さんや畑さんから『臨床哲学ニュースレター』をいただきました。それを読ませていただいて、こういう試みがあるのなら大学も捨てたもんじゃないのかなという気がします。

レジュメの最初に鷺田さんの書かれた部分を引用しています。最初からゴマするようで、こんな引用やめとこうかなとも思ったのですが、私が迷い迷いしながら考えてきたことの非常にだいじな一面

をたいへん的確に押さえられていると感じました。臨床哲学には、三つの契機があって、聴くということ、そして匿名の普遍的な読者にたいしてではなくて、語りかけたい具体的な相手に向かって書くという姿勢、そして、あるひとつの特殊な場面を一般的原則の特殊例とみるのではなく、その特殊なものがむしろ一般的な原則を揺るがすという方向でものごとを考えるとということ。この三つは、私が「親の会」に参加しながらずっと考えてきて、うまく言葉にできなかったことを非常にうまくまとめられているように思います。

前回の大阪の親の会の定例会にも、大学で研究なさっている方がお二人来られました。不登校やイジメの研究をされていて、親の会でどんな話がされているのか聞きたいとおっしゃるのです。私たちは、関心をもっておられる方ならどなたが来られてもよいということですが、「どこかちがう」という感じを両者がもってしまうようです。

研究者は、ともすれば、不登校についても、それを「神経症的な不登校」だとか、「逃避的な不登校」だとか、「退行的な不登校」だとか、「遊び型不登校」だとか、さまざまな類型化をなさいます。しかし、現に学校に行っていない子どもをもつ個々の親にとっては、わが子が何型に属するかということなど、まったく問題にならないのです。問題に対処するスタンスがちがうのですね。

高いところから全体を俯瞰しうるといふことは、現実には絶対にありえず、そういう特権的な視点というものは、ものごとを考える方法として仮構することはできるのですが、それはあくまで仮構だということを忘れてはいけません。

私もそうですが、学校の教師も、全体を俯瞰するかたちでものごとを見る習性をもっています。教壇に立って、30人、40人いる子どもをクラスとしてどううまくまとめるか、そんな視線で子どもたちを見る。そういうまなざしは、ほぼ必然的に、リーダーに向く子、向かない子、算数の得意な子、苦手な子、運動神経の発達している子、していない子、というふうに腑分けをします。そして、そういう子どもたちを3、40人まとめて、どううまく学級経営をしていくか、どうしてもそういう発想になりがちです。

あるいは臨床現場でも、精神科医やカウンセラーなりが、つぎつぎにやってくる子どもたちやお母さんを観察しているうちに、いくつかのパターンが想定されるというもの、ある意味では避けがたいことかもしれません。しかし、そういう事例をたくさん集めて、いつのまにか全体を俯瞰できたかのように思いなすのは、錯覚ではないでしょうか。

私は「親の会」の世話人を八年続けてきたわけで、私もどこかで一般理論みたいなものを書いてしまって、そういう一般論に当てはめて特定の子どもをしかるべく整理してしまうということになりが

ちです。しかし最後は、ひとり一人の子どもに沿って、そこにしかないひとりの人間として、だれに置き換えることもできないその子ひとりの独自の成り立ちとして、その子の抱える問題の辛さ、または、生きようとするその姿勢を見守るということでは、思っているほどではないのです。そこでは、その子が何型の不登校かなどということ、まったく問題にならない。

レジュメの最初に、とりあえず、上のような無難な演題にして、それがちっとも無難ではないと書いていますが、「増え続ける不登校が問いかけているもの」なんていうタイトルは、すでに巨視的というか、鳥の目で、大所高所から俯瞰する視点をはらんでいるのです。つまり、この子、あの子の問題なのではなく、「十万人が不登校になる」というのはどういう状態なんだ」という、かなり巨視的な、大所高所の議論になってしまいます。「子どもの現在」という言い方にしても、うっかりすると「本来の子ども」というものを仮構して、「現在」を俎上にのせるかたちになってしまう。「学校の現在」という場合も、「本来の学校」、あるいは「こうあるべき学校」というものを前提して論じられることが多い。暗黙のうちにそういう含みが入っている。その上で、子どもにしても、学校にしても、現在はこんなに歪んでいる、なんでこんなになってしまったのか、という議論になるのです。

けれども、肝心なのは、今ここにいる、

この具体的な子どもなんですね。今私たちの目の前にいるこの子を除いて、「あるべき子ども」だとか「本来の子ども」だとか、あるいは、今私たちの目の前にある個々の学校をのぞいて、なにか普遍的に「学校とは……」などと論じてしまう。よく「日本の学校は……」というような、すごくおおざっぱな議論がなされますが、たとえば高校ひとつとっても、これが同じ高校なのかと、びっくりするほどちがうんです。早い話が、「今の日本の高校は……」というときに、定時制高校は端から枠外において議論されます。で、「どこの高校の話なの？」というふうになってしまいます。

私は極端に言えば、「本来の～」というもの、この「～」には、「学校」とか、「子ども」とか、「家族」とか、または「父親」とか、あるいは、「父親として果たすべき役割」とかが入るのですが、そんなものはどこにもないと思っています。

毎年の夏に、前年度の学校基本調査の中間まとめが発表されて、その年に不登校した子どもの数字が6万人、7万人、8万人、そして昨年はずいぶん10万人を突破したという、そんな報道がにぎやかに行われます。「10万人突破」という今年あたりから、「史上最悪の数値をまた更新」というような報道は、さすがに少なくなりました。それまでは、不登校というのは、あってはならない事態が一向に収まる気配なしに、どんどん増え続ける、ど

んどん悪くなる、という感じでずっと報じられてきたのですが、今年あたりから、少し冷静に距離をおいて、むしろ学校というものが、一人残らずすべての子どもを囲いこもうとしてきた、そちらの方がおかしかったのではないかという、これまでのあり方を見直す方向での論説さえ見られるようになりました。

たとえば朝日新聞の静岡版では、「ぼく、学校なんて嫌いだい」という見出しで報じていました。つまり、今の子どもがどうのこうのという前に、むしろ学校の限界をもっと冷静に見ておいた方がいいのではないか、あるいは、子どもを学校にもどそうというだけではなく、現に学校に行かない子どもがいるわけだから、そして、その子どもの親も同じように税金を払っているわけで、学校復帰の施策ばかりではなく、学校に行かない子どもの居場所にたいしても公費の助成があっているのではないか。そんな議論も一般紙で展開されるようになってきています。

前回のこの研究会で、栗田さんが「不登校をめぐる様々な言説」というレジュメを用意されて、頼藤さんとか、富田富士也さんとか、不登校にかかわるさまざまな論説のパターンを資料として出されています。たとえば頼藤さんは、「低耐性の児童」「こらえ性のない子ども」、これらは、結局は、「ちょっとしたことでむくれてしまう子ども」というほどの意味なのでしょうけれど……。こんなふうには、学校に行かない子どもにいろいろなレッテ

ルを貼って問題視してきたんですね。

この間の経緯は、自分の子どもが学校に行かなくなったお母さんやお父さんでなければなかなかわからないでしょうけれど……。最初はやはり、両親もふくめて、「この子は甘えている」、「こんなことでいじけていたんじゃない、この厳しい世の中やっていけないよ」というふうに、大人の側からのいらだちだとか、周囲の鋭い視線に子どもはさらされ続けるわけです。当の子ども自身も、親にずいぶん心配をかけている自分を否定的に見つめます。自分さえ目をつぶって学校に行けば、両親をよろこばせることも、隣近所に気兼ねすることもいらないのだと思うけれど、それが「できない」のですよね。それは、甘えだとか、楽な方に逃げているだとか、そういうことではけっしてないのですが、そのあたりの事情は、ずっとその場に居合わせた人でなければ、なかなかわからないのではないかと思います。

で、ほんとうに頑として行かない子どもの姿だけが目の前にあるのです。子ども自身にも、そういう現実の説明はなかなかつけられない。当たり前ですよ。学校に行くのが当然とされていて、自分以外のみんなは難なく行けているように見えるなかで、「行けない」「行かない」自分の状態をうまく説明する言葉はほとんど与えられていないのですから。「なんで行かないの」と聞かれて、「こうだから行かないのだ」ということはなかなか言えないのです。しかし、硬軟とりまぜた不

断の「再登校」へのプレッシャーにもかかわらず、「行かない」、頑として「行かない」という子どもが増え続けていくなかで、私たちはようやく「いったい、学校って何なのだろう」と考え直すところにまで来れたのだと思います。

最初にも言いましたが、人間とか社会にかかわる研究といいますが、およそものごとを考えていくときに一番だいじなのは、「何かがちがう」、「何かがおかしい」という、打ち消しがたい感情ですよ、個々人が持っている。

子ども自身も、「何かちがう」、「何かおかしい」、「何か”すっ”と生きられない」というような、そんな、うまく言葉にしない気持ちにこだわっているのだと思います。そこに一番早く気づく場所に、お母さんたちがいたのだらうと思います。

けっして大きな理屈が先行したのではないのです。たとえばイリイチの「脱学校」論だとか、欧米のフリースクールやホームエデュケーションの理論だとか、そういうものに依拠してわが子を守ろうとしたのではないのです。とにかくこれ以上「この子を学校には行かせられない」という直感的な気づきがまずあったのです。将来の心配がないといえは嘘になるけれども、とにかく今この子に必要なのは、学校に行かせることではない、さしあたりは行かないという状態で、この子をどう支えようかというところが出発点だったのです。

そうしてやがて、「親の会」に集まるよ

うにもなって、お母さんたちは、子どもが行かなくなって、なぜ自分はあるにおろおろしたのだろうかというふうに、自分の問題として事態をとらえなおしていく。「何かちがう、どこがおかしい」という子どもの気持ちに、母親としての自分自身の「居心地の悪さ、据わりの悪さ」やはり「何かがおかしい」という気持ちを重ねるといふか、なにかそんな感じでものごとを見直すようになる。「親の会」の歩みはそのように進んできたと思います。

栗田さんが参考資料であげられたのは、どれをとっても、せいぜい学校に行かない子どもにたいして同情は示しても、やはり不登校は「逸脱」であり、なにかしら本来の姿を踏み外しているという観点に立っていることでは共通しています。ちがいは、それを子どものせいだとするか、子どものせいではなくて、子どもをそういう「逸脱」に追い込んでしまった社会、あるいは学校のせいだとするか、そのちがいであるにすぎません。

私も、このあたりで、ちらっと「鳥の目」を借りることになってしまうのですが、学校というもの、とりわけ、九年間の義務教育という、子どもたちの学びの制度、それがもともとたいへんな無理をはらんでいたのだけれど、いまようやく、その無理が無理として見えてきた、そういうことではないかと考えています。

行かない子どもたちが現れはじめた事態を、まがまがしく、憂うべきことが増

えてきたということではなく、義務教育制度がもともと抱えていた無理がようやく見えはじめてきた、それほどに私たちの社会が豊かになってきたのだ、そういうふうにとらえ返す視点が一本いるのではないかと、そう私は考えています。

不登校については、これまでずっと、世の中が豊かになりすぎて……という文脈で語られているのですね。その豊かさの中身を、私自身もこれがほんとうの豊かさなのかと問いはしますが、それを豊かになりすぎてというかたちで括っちゃいけない。富田さんは、その「豊かさ」に「戦後民主主義」なんていうものまで不用意に重ねちゃったりもするのですが、そんなものを十把一絡げにして、どんどん世の中が悪くなっているという方向での議論、その悪くなっているということを戦後日本のさまざまなキーワードをつかって、これがあつたからこうなつたんだというように括る議論はいただけない。そうではなくて、学校がすべての子どもたちを抱え込めなくなるほど、子どもたちの生き方、ものの考え方が豊かになりはじめたのだと、不登校を豊かな社会の病理ととらえるのではなくて、豊かになったがゆえに不登校が可能になりはじめたのだという見方が一本いるのではないかと私は思います。

「社会」という言葉の使い方に、私はもう少し慎重でありたいのですが「社会階層論」などを講義していますと、社会の有機体モデルや機械モデルから脱するこ

とがいかにむずかしいかを痛感します。とりあえず、社会とは人間関係の束であると考えます。実体化するのではなく、関係の束、さまざまな人間が織りなす、輻輳した関係の束として「社会」を考えるわけですが、その「社会」が豊かであるとは、どういうことなのかについて、私たちは貧困なイメージしか持っていない。

これまではかき消されていた小さな声、弱い声、声なき声が聞こえるようになる、ということが「豊かな社会」の一番たいじな指標だと、私は考えています。学校がきらいだという子は、戦前にも戦後初期にもいたはずなんです。でも、なかなかそうは言えなかったと思います。それをそう言ってもよいのだと、行きたくないなら、行きたくないと言ってもおかしくはないのだと言えるほどに、私たちは社会を、人間関係の束としての社会を、豊かにすることができたのです。そういう方向で社会の豊かさを考えたい。

「そんな小さな声にいちいち耳を傾けていたら、この社会はぐちゃぐちゃになってしまうんじゃないの」という声が聞こえてきそうですね。実はこれがずっと強者の声だったのですが、もともと「ぐちゃぐちゃ」といいますか、「むちゃくちゃ」なものを、私たちは「社会」とこざいりに呼び慣わしているだけなのです。その「むちゃくちゃ」のなかをね、こんなふうに生きたい、あんなふうに生きたいと思っている私たちがひしめきあって

いる。その錯綜する利害をすりあわせ、折り合いをつけていくのに、精いっぱい手間暇を、時間をかける余裕をもった社会こそが豊かな社会なのではないでしょうか。

* * *

そして実際に、悪いことばかり起きているのではなくて、私がいう意味での「豊かさ」のきざしはあちこちで見ることができます。

たとえば、レジユメに「『行かない』が選択なら、『行く』も選択」という見出しで、久貝登美子さんの文章を紹介しています。久貝さんは、姫路で前々からホームスクーリングの運動をなさっている方ですけれども、その4月か5月かのニューズレターに書かれたものです。読んでみます。

「5月のはじめ、家庭訪問のついでということで、娘の学級担任が身分証を持ってきてくれました」

この方は、「自宅学習証」というものを、校長に発行させているんですね。異例のことなので、まだあんまり大きな声で紹介しないでね、と言われていたんですが……。

今は、小中の義務教育年齢の子どもが授業時間中に図書館に行ったり、博物館に行ったり、美術館に行ったり、まあ、公共施設ですね、スポーツ施設でもそうですが、そんなところに行きますと、「ちゃん、今日、学校はどうなってるの」、「あんだ、学校どこ、担任はだれ？」と

というようなことになるんですね。公共施設だけではなく、普通のお店などでも、そうなんです。

皆さん方も、学校に行って2時間目ぐらいになって、3時間目の図工で先生が持ってこいと言っていたものを忘れたことに気づく。家が近かったらあわててとりに帰るってようなことがあったでしょう。つまり、みんなが学校にいる時間帯に、なんかの事情で家に立ち帰ったことが一回ぐらいはあるでしょう。そんなとき、すごく不安な、居てはならないところに居るような気がしませんでした？私が子どもころも、親が共働きで、だれも居ない自宅にもどったことが二、三度あります。午前11時前後の家、商店街も町の雰囲気も、放課後とか朝早くとはちがっていて、なんか居てはならないようなところに迷いこんでしまったようで、要るものをつかんで、がっとうちに帰って、みんながいる教室にもどるとほっとする、という感じ。なんか、それほどに、子どもってというのは、学校という時空間に囲い込まれているんですね。

エンデに『モモ』というファンタジーがありますね。老若男女が集まっている話をする村の広場があって、そこに「聞き上手」のモモがいる。そのモモがしばらくよそに行って帰ってみると、町から子どもの姿が消えていた。どこへ行ったんや、と探してみると、みんな学校に囲い込まれていたのですね。みんな『モ

モ』をいい作品だというけれど、ちゃんと読んでいない。時間泥棒の寓意にしても、さきほど私はたつぷりと時間をかける必要について触れましたが、あまりちゃんとは読まれていない気がします。

ともかく、学校で授業がある時間帯に子どもが家にいたり、町中をうろろろするというのは、たいへん目立つ行為なんです。自室に閉じ込める子どもの弱さをとやかく言いますけれど、閉じ込めさせているんですよ、みんなで、よってたかって。

久貝さんは、そういうのを少しでも無くそうということで、校長にかけあって、「自宅学習証」というのを発行させて、お子さんが図書館だとか博物館だとかに行くと、係の人に「あんたなんでこんなところにいるの」と言われたら、それを見せればいいという工夫を考えたのですね。ほんとうは、しかし、校長にそんなことを許可してもらおうということ自体が本末転倒で、おかしいんだ、と久貝さんも言うておられます。でもね、子どもが気兼ねなく出歩けるために、そういう苦肉の策も弄さねばならない、そういう状況があるのです。そういう状況を一步でも切り開こうという知恵なんです。世の中の関係を変えるために具体的に動きはじめると、いつでも明暗反するものがつきまとうんですね。子どもが動きやすくなるようにするために校長の許可がいるというのは馬鹿げた話で（「義務教育」の義務というのは、学びをふくめた

子どもの成長のための時間・空間を大人が手厚く保障する義務のことなんですから、ほんとうはそんな「許可証」などいらないんですけれど、まあ、たいてい、なにか動き出すときというのは、そういう矛盾をあえて引き受けるということなんですよね。

とにかく、続きを読みます。

「そのときに、先月の、クラスの子どもたちに娘のことをどう説明すればいいのかという話の後日談をうかがいました。「どうでした?」と尋ねると、「ちょうど次の日、子どもたちのほうから《なんで休んどん?》という声があったので、聞いたとおりに《久貝さんは、家で学んでいくのを選んでるんや》と説明しました。すると、ある子どもが《そしたら、僕らは、学校に来ることを選んでるんやな》と言いに来ました。《そういうことになるなあ》と返事をしました」

これはねえ、私も、教職員の研修会などに呼ばれることがありまして、「(不登校で)休んでいる子のことを、クラスのみんなにどう説明したらいいんでしょう」という質問をよく受けるんですね。これは、私も教師ですから、たいへんむずかしいんですよ。でもね、それはやっぱり教員の立場でものを考えるからむずかしいんであって、当の本人、その子の保護者が「このように説明してください」と、はっきり意志表示すれば、いっぺんに解決する問題であると、私はこれを読んで思いました。

教師というのは、「子どものため」、それも不特定多数の「子どものため」を建前にしながら、個々の子どもの声にちゃんと耳を傾けて、その意志表示を尊重するということがなかなかできない。そして、この子にこんなことを言えばこうなるんじゃないか、あんなこと言ってほしいょうぶやるか、という感じで、無難に無難に言動をコントロールしてしまう。主体は学ぶ子どもの側にあり、その子どもの利益をだいに考える保護者のイニシアチブがしっかりしていれば悩まなくてすむ問題に、いま教師は悩まされていると思います。子どもの最善の利益を、当の子どもよりも、その親たちよりも教師がよく知っているという思いなしに立って、教師が「よかれ」と思うことをどんどん抱え込んで抜き差ししないところにみずから追い込むことになっているのではないのでしょうか。

教師たちは、子どもを「成長途上の未完成の存在」とみなし、その保護者についても、自分の子どものことしか念頭のないエゴイストというか、その無知を問題にします。そして、つねに子どもを評価の対象にし、その子どもの背後にある家庭についても評価するという、そういう眼差しでものを見えています。ですから、教職員の研修会なんかで不登校の話を見せていただいても、かならず「親のなかには無理解な人がぎょうさんいて、教師の苦労も知らないで、ごく基本的なしつけもできないようなひどい家庭がいっぱ

いあるんですよ」というような不満を聞かれます。けれども、子ども、ひいては保護者の最善の利益を教師や学校が代弁する（パトロナイズする）という従来の構造じゃなくて、本来を言えば「本来」という言葉は禁句だったはずなんだけど、子どもや親がしっかり意志表示をしていくことによって、学校の雰囲気はがらっと変わっていくだろうと思うんですね。久貝さんの場合、まさにそうなんです。そこに、とらわれのない若い先生がからんで、先にみたような会話がクラスのなかでできはじめています。それを久貝さんは「素敵なことだ」と書いておられますが、私もほんとに素敵な話だと思うんです。

こんなふうに先生と子どもの対話が増えて、学校に行くということがなにもあたりまえではなくて、行かないのと同様に、行くのも「選択」なんだと気づいていく。憲法に思想信条の自由が謳われていますけれど、いつ、何を、どんなふうに学ぶか、なんてことは、思想信条の自由の根幹にかかわるはずだと、私は考えています。

学校というのは、便宜なんです。手持ちのさまざまな経済的、文化的、社会的資源を、子どもの成長や学習にどう配分するかというときに、それぞれの社会がとりあえず設ける便宜なんです。それをどういうふうにするかということ、その便宜を与える側から考えるのではなく、その便宜を利用する側が考えればいいのか、

で、そんなふうにして、たとえば「不登校の子のことをクラスのみんなにどう説明すればいいんでしょう」という質問には、私は、「『本人が休みたいと言っているのだから、休んでもいいじゃないの』と気軽に言えるようになればいいですねえ」と答えるのですが、なかなかそうはならないから、いろいろ双方で気をもむことになるのですね。

ここでもうひとつ、ふりかえっておきたいことがあります。戦後五十年のあいだに日本の社会が被ったほんとうに急激な変化。私たちはつい（その経過に要した）時間を忘れるっていうのか、結局はどうなるのかっていう結果を優先してものごとを考えてしまいます。そして、社会が近代化する、あるいは産業化する、都市化する、情報社会化する、などとさまざまな言い方をしますけれど、結局はそうなるにしても、そこにどれだけ時間をかけるかっていうことが非常に大きな意味をもつと、私は思うんです。

そういう意味で日本の戦後五十年の社会変化、世界史的にも類例のないような変化の急激さ、その速さ、みたいなものは、私たちがいま直面している問題を考えるとき、ぜひとも念頭においておく必要がある。佐藤修策さんの『登校拒否ノート』からの文章は、そういう変化の急激さに私たちが思い至るよすがとして引用しました。

しかし、「子どもの教育はおれがする、

ほっといてくれ」という漁師さんがいた一方で、学校教育にすぎりつこうとした農民もいたということを見落とすことはできません。

皆さん、「日本のチベット」ってご存じですか。岩手県のことなんですけれど、岩手県に失礼というより、チベットに失礼と思うんですが、まあ、かつてほどにはこういうもの言いをしなくなったという意味でも、私たちのものの考え方はずいぶん豊かになってきたと思うんですよ。私の子どもころはまだ平気で「日本のチベット」なんて言ってましたからね。あるいは、「裏日本」とか「山陰」だとかいう言い方もおかしいんじゃないか、ということに今はなっていて、私は、この世の中、まんざら捨てたものじゃないという気がしているんですがね。

敗戦後、その岩手県で古着の行商人をしていて、その後、地域保健医療の活動家として名の知られた大牟羅良さんの著作に『もの言わぬ農民』という岩波新書の古い本があります。これは、私が『匪賊』の翻訳をしたときに、その「あとがき」でも紹介したんですが、「日本のチベット」で青春の鬱屈を感じて「満洲に渡れば」ってということで大陸に向かった大牟羅さんが、そこで匪賊に巡り合っているのです。そういう意味でもたいへん印象深い本なんですけど、ともあれ、敗戦後の日本に帰ってきて、岩手県で古着の行商をやりながら生計を立てます。そのときに、「青田刈り」という言葉をご存知

ですよ、まだ、田圃が青々としているうちから、その収穫を担保に入れても学童服の古着を買おうとする農家があった、しかも、貧しい農家ほどそうだった、と大牟羅さんは書いています。

学校というものが、おのずから権威をもつに至る歴史的、社会的な文脈をふりかえるうえで、この本の記述は重要なことを教えていると思うのですが、先を急ぎます。

私たちは、すぐ「日本は」とか、「日本人は」とか、あるいは「終戦直後は」というようなことを言いますけれど、日本人にもいろいろある。学校との関係についても、一時期の瀬戸内には、「英語で鯛が獲れるかい」こどもの面倒はおれがみる、ほっといてくれ」と言えた漁師がいたかと思えば、小さな耕地にしか恵まれず、どうにも農家としての先行き、展望がないというなかで、少々の無理をしても子どもを学校に上げよう、卒業はさせようということで、青田を担保にいれても古着の学童服を求める親も、一方にはいた。

ほんとうに、社会が豊かであるとはどういうことなのでしょう。

「豊かな社会の病理」というかたちで登校拒否をとらえることが多いのですが、やっぱり、「豊かな社会の病理」という言葉自体が、そもそも「社会」というものを、わりと単純な「有機体」か「機械」のモデルでとらえていて、私には、たいへ

ん危険な響きをもっているように聞こえます。そして、結局は、がまんをなささい、豊かさに溺れてはいけません、というようなお説教に聞こえます。

「社会が病む」などということは、比喻としては言いえども、それ以上のことは何も明らかにしておりません。社会というものに、何か共通の目標がはっきりしていて、それに向けて和気あいあいとみんなが所を得て、どこにも矛盾や軋轢がないような社会、それが「健康な社会」なんでしょうか。けれど、そんな社会を私たちは今までに作り上げた試しがないんですね。「社会が成り立つためには」という言い方を私たちはよくしますが、社会が成り立った試しはいままでにはないんです。だれのために、どういう社会が成り立ったのかということなら、言えるかもしれないけれど、すべての人にとって、同じように、ああこれが私の社会だというようなかたちで成り立った試しは、かつて一度もないのです。

とはいえ、しかし、さしあたり「社会」とでも呼ぶ以外にない、この同じ、与えられた時間と空間のなかで、私たちはともに暮らしています。そのとき、どこまで譲り合い、どこまで助け合い、どこまで自分の責任として引き受けるか、というようなことなんですね。私たちが漠然と思いなしているものよりも、もっともっと混沌としているのが「社会」なんです。豊かな社会なんです。「おまえうるさい、ちょっと静かにしろ」というよう

なことをどれだけ言わずにすませるか、譲り合えるか、そこに豊かな社会の豊かさのほんとうの証があるんだと、私は思います。

つぎに、「学校への違和、私の場合」と書いていますが、略歴をご覧になればわかりますように、私はずっと優等生でしたんですね。優等生っていうのは、周囲の期待に応えることに敏感な者のことです。まわりが自分に何を望んでいるかをさっと読みとり、期待されたらその期待に応えようと努力する、そんなふうにならなう。けれど、まわりの役に立てたり、期待に沿えたりできるあいだはいいけれど、どこかで行きづまってしまうと、もともと自分の問題として出発していないというところがあるから、いつまでも勉強や努力が足りないというふうに考えてしまう。あげくに、その勉強や努力自体が他人事のように空回りしてしまう。

小さなことでいえば、何かものを書こうとしても、ああ、あの文献も読んでいない、この文献も読んでいないと、気後れしてしまふ。そんなことを言い出したら切りがないんですけどね。大きくいえば、人間が生きるというのは、いつも準備が整わない状況なんです。なんかすっかり準備ができてから、さあ、これからはじめよう、ということには絶対ならないんですね。私は、そのあたりを、長い間、やっぱり勉強が足りない、あれを読

んでから、というふうに、先へ先へと自分自身の問題をくり延べてきたように思います。自分の問題を、そのときどき与えられた条件を引き受けながら自分なりに考えていく、それ以外ではありえないんだということに、なかなか気づけなかった。ものを書くということだけにとどまらず、およそ、条件が整わないなかで、わからないことがまだいっぱいあるなかで、それでも何かを選びとるといふかたちで、私たちは生きているんだと思います。

それを、学校というところは、「なにを偉そうなことを言うか。自分でものを考えるなんて10年早い。おまえにはまだこれだけ勉強せなあかんことがあるやろ」といふかたちで迫ってくるわけです。こうして刷り込まれる習性は、学校への適応が長いほど後々まで引きずりますから、子どもも大人も含めて、それぞれがそれぞれの持ち場で、それぞれに与えられた条件のもとで、自分にとって最善のものを選びとる、そういう大らかな生き方というものを、学校教育というのは、よってたかって人々から奪っているのではないか、そんな気がいたします。

最後に、私が少しは勉強してきたことというのは、実は、労働組合運動なんです。これはこれで、話すと長くなりますから端折って申します。

日本の社会の寂しさ、というのがどこにあるかと言いますと、親が子どもにしてやれることというのが、せめて学歴をつけてやることしかないという世相、そこが一番寂しいと思うんですね。

つまり、仕事をもつ父親、パートで働く母親、あるいは専業主婦(家事労働)でもいいんですが、そういう労働の場において、何かちがう、何かおかしいというものを、親たちもうすうす感じていると思うんです。それがうまく表現できていない、というか、戦後の高度成長のなかでは、まあ、切迫した問題にしなくてもすんできたのかもしれませんが。全体にパイがふくらむというなかでやってきたからね。

年功序列、終身雇用の時代はもはや去った、などと盛んに言われますが、もともとそんなものはどこにも明文化されて保証されていたわけではありません。日本的な集団主義も時代遅れだと言われますけれども、日本の終身雇用、年功序列の中身を調べてみればわかりますが、この実態は、たいへんに競争主義的、個人主義的、能力主義的なシステムなんです。しかも、人間を全人格的に評価する能力主義、潜在能力までも評価するかたちでの能力主義的なシステムなんですね。そんな厳しいシステムがぬるま湯のように見えたとすれば、たまたま日本の高度成長がしばらくは持続して、矛盾が矛盾として露呈しなかつただけだと、私は見えています。

子どもたちの学校における居心地の悪さと並行する感じで、日本の親たちの職業生活における自信のなさっていうか、なんかじっくり自分が生きていないという思いがあるのではないですか。1974年以降の中高年労働者の雇用不安というものが、以外と根深い影を社会の全体に投げかけているように思います。

私が町工場を辞して、現在の今宮工業高校の定時制に着任したのが1977年、大阪が第1次オイルショック後の構造不況に直面しているさなかでした。私たちの生徒のなかにも、名村造船とか、佐野安ドックとか、大阪の中堅造船業、それから、淀川製鋼だとか大和製鋼だとかの、これまた中堅の製鋼メーカーで働いている者がいて、かれらがそれぞれに大々的なリストラにさらされていました。一人の生徒が学業半ばで地方への配転命令を受けるといったようなこともあって、私もさっそくに争議団を支援する運動にかかりました。結局は負けるかたちで話がついて、去っていく組合員を励ますお別れ会には、私も来賓で出席して挨拶しました。それはねえ、40、50歳になる、造船一筋で生きてきたお父さんたちが、まだ3つ4つの男の子、女の子の腕を引いて、お母さんと一緒に、もう組合もない、職場もない、そんな無念を背負って家路につく、そんな後ろ姿を見るのは、ほんとうにつらかったですね。

で、子どもにはこんな悔しい、つらい思いだけはさせたくない、と、だれでも

思いますよね。世の中にはいろんな仕事があって、おまえがどんな仕事についても、そこには仲間がいるんだよというメッセージを子どもに伝えることができるなら、まだ救いがあるんです。どんな職場にいても、なんとかやっつけていけるもんだよ、助けてくれる仲間がいるよ、というふうに、自信をもって子どもに語れなくなっただということがあると思います。結局、家族を、あるいは、自分を守るのは自分一人の力しかない、というような感じになってきているんですね。

そんななかで、親が子どもに託すメッセージ、あるいは、してやれることは何だろうと考えたときに、学歴しか思い浮かばない。それでいて、学歴をちゃんと与えてやれば、この子は一生安泰というふうにも、もうだれも信じてはいないと思います。いい学校出て、いい会社に就職すればもうだいじょうぶなんて、だれももう信じていないと思います。信じていないけれども、せめて親としてしてやれるのはそれだけしかない。そして、子どもにとっても、そのあたりが一番しんどいのです。なんか砂を噛むような切なさですね。そんな親の気持ちが子どもにもよくわかるんです。だから、なんとかして親の期待に応えたいとみんながんばっているんですよ。これだけ、学校のありかたが問題になっても、まだまだ圧倒的に多数の子どもは学校に行き続けています。私たちがよくよく考えてみなければならぬのは、不登校よりも、

登校し続けている子のしんどさかもしれません。

* * *

で、ワークシェアリングについて、もう時間がありませんから、ほんとうにかんたんに申します。最近、私はそう言い続けているんですが、一方で失業者が出ているのに、残業なんか絶対にしたらあかんのですね。

しかし、さっきも申しましたように、第1次オイルショック以来、大阪のさまざまな職場をまわって歩いておりますけれども、一方で希望退職の募集があるんですね。希望退職なんて言っても、だれもほんとうに希望して手を挙げるのではないんです。ここには、たいへんつらい過程が含まれているんです。自分が働いている職場をずっと見まわしてね、「会社は何人余っていると言っている。今度辞めなあかんのは、どうも俺みたいやな」と、そんなふうにして絞り出される希望退職なんです。造船一筋で20年、30年やってきた人に、それまでの賃金に見合うような転職先なんて、あらへんですよ。それでも、管理職が「おまえや」と指をささなくても、職場の雰囲気を見たら、なんとなく「あいつや」「ああ俺や」ということで、希望退職募集というのは、だいたい、どこの会社でも、150人を何月何日までと期限を切って募りますと、200人、300人と超過達成をして、ほとんど波乱なく人減らしがなされるのです。

で、残った人たちには、その後、残業

が続くんですね。毎日毎日残業。片一方で、仕事を追われた人たちがいる。片一方で、残った人たちが残業に明け暮れる。当時、鎌田慧なんかは、そういう状況を指して、「去るも地獄、残るも地獄」ってルポに書いたんですけど、おおきな流れで見て、日本の社会って、そういうふうになっているんですね。これほど、連帯というか、ともにひとつの社会に暮らしているという意識の乏しい社会もめずらしいのかもしれない。そういう社会を、大人たちは「実社会は厳しいよ」という言い方で子どもたちに伝えているんですね。「だからせめて学校にいるあいだに……」と子どもたちを激励するわけですが、これでは子どもにも、将来ってなんか面白くなさそうだなあ、ということになるのは当然ではないかと思います。

失業者がいるあいだは残業しちやいけないうんですね。残業を減らしても失業者が減らないようなら、賃金が少々下がることになっても働く時間を減らさなくちゃいけない。これは、理想論でもなんでもなくて、西ドイツ、あるいはフランス、そしてアングロサクソン系っていうのは労使関係は不文律、慣行というかたちでやりますから、法的な整備は遅れがちですけど、仕事の機会をみんなで分かち合うという、ワークシェアリングの仕組みはまだまだ健在です。市場社会では、もっとも壊れやすいのが仕事の機会なんです。それを競争で奪い合うようなことをしていたら、仕事の機会は総体と

して劣化する。そういう機会を奪い合う競争は制限しようという哲学が、欧米の労働組合運動の長い歴史のなかにはあるのですが、私たちも、そういうことを本気で考えていく時機にきているのではないのでしょうか。



それから、ほんの一例ですが、たとえば公務員としての仕事の機会がどんなふうに配分されているかということについても、考え直してみるべきだと思います。ここでも競争選抜の仕組みが働いていて、法制度的には義務教育を終えていれば受験資格があるはずなんです、いつのまにか中卒者を高卒者が追い出し、高卒者を大卒者が追い出すようなことになっています。けれども、中学校を卒業してすぐ働きに出る人というのは、みずからの「教育」に社会的な資源を使うことのもっとも少なかった人ですよね。その人たちにこそ、「よい仕事」の機会を配分するというふうな発想も必要だと思うんですね。それが、コミュニティというものの節度ではないのでしょうか。もっとも、「よい仕事」とは何か、という、その中身をいまは問わないでおきますが。

個人主義、自由主義、能力主義をそれぞれどう定義するのか、そこをあいまいにしたままお話していますから、場合によっては誤解を受けるかもしれませんが、日本の社会は、全体として、大きな流れとして、この方向に動いていると思います。世界規模の競争の時代だとも言われています。不登校の子どもたちに寄り添いながら、学校に行かない選択もあるよという私たちも、当面は、この大きな流れに竿さしているっていうか、乗っているように見える側面もありますが、いずれどこかで、この流れとは異なる水路を切り開いていく努力が大切になるように、私は思っております。

まとまりの悪い話を、長々とお聞きくださいまして、ありがとうございました。

後記。ずる賢くも、最初に「私の話はあちこちで破綻している」と逃げをうっています、テープから起こされた記録を読ませていただいて、文字通り、身の縮まる思いがしました。こうして文字に残るのですから、論旨が少しはたどりやすくなるように、全体に手を加えました。実際に言ったことを取り消したり、まったくちがう内容にすりかえたりはしてありません。テープ起こしの労を引き受けて下さった方々に、ひたすら頭を下げたいと思うばかりです。

1999年2月16日 山田 潤

特集：教育の臨床哲学

第1回研究会の参加者より

子供が不登校をした時、その現実が受け入れられなくて、まず頭の中はパニック状態になりました。

専門家といわれている方々の本もいろいろ読みましたが、どうも納得がいかなかったです。まともに読んでいくと、ますます親子とも追いつめられていくような気がしました。

”不登校の三つのタイプ”とか”母子密着”だとか”父親不在”だとか、最近では”IQが高くてEQの低い親”が原因だとか・・・不登校児10万人となった現在でも専門家はあいかわらず好き勝手を言ってくれます。

我が子のおかげで今まで見えてこなかった大事なことが、少しずつですが、まっすぐに見えてきたような気がします。

子供の不登校にはじめて”だいじょうぶだ”と自信がもてるようになったのは、東京シュレーの子供たちが書いた本に出会ったときです。題は『ぼくの色、君の色、自分色？』今、手元になくははっきり思い出せませんが、本当にいい本でした。読んだだけで、どの子供たちもいっぺんに好きになりました。彼らは、なんて表現すればいいんでしょう、人間くさい・・・というか、動いている子も、じっとしている子も、心の豊かさであふれている、そんな感じ

がしました。

それと、親の会は存在も大きかったです。会で出会ったお母さん、お父さんたちは、私にとって素敵な人たちでした。この人たちのどこが特別な親(?)なのでしょう。

不登校について一番よくわかるのは専門家じゃなくて、やっぱり本人と、その親なのではないでしょうか。

でも、世間の理解はこの専門家といわれる人たちを通してなされることが多いので、始末に悪いです。

仮に我が子が、昔言われていたような情緒障害、神経症、とか言われる存在であったとしても、親に取ったらかけがえのない存在です(不登校で起こるこれらの症状は、家族や社会が本人を追いつめてなってしまう、二次的なものであると、心ある専門家は語っています。またこの事実は当事者が実感しています)。

人の痛みと関係のないところで分析を行い、多くの偏見を社会に広げてしまった専門家といわれる方々の言葉とペンが、これ以上人を殺す事のないよう、心から願っています。

親の立場として、私が今一番語りたいのはこのことです。

高井 るみ子

特集：教育の臨床哲学

学校教育は 何のために あるのか

寺田俊郎

「不登校」を通じて学校教育を考える試みを続けてきた。臨床哲学研究会や研究室での討論を通じて刺激を受け、文献を読み、いろいろ考えてきたが、まだ私自身の言葉で学校教育を語れないでいる。出発点として私自身の教員経験があり、それに則して考え発言してきたつもりであるし、これからもそうしていきたい。しかし、自分なりの視点というものがまだ定まらない。残念ながら、今は甚だ断片的なものしか書くことができない。

「不登校」の子どもと親の苦しみは、学校というものがどんなに強く我々の意識を規定しているかをあらためて教える。栗田隆子は、学校に「行きたくない」自分が象徴する価値観はとても恐ろしいもので、「行きたくない」という気持ちを無視すると、「身体がそれを忠

実に私に知らせてくれるのが役割であるかのように」体が動かなくなる経験を報告している（98年度第1回臨床哲学研究会での報告、『メチエ』創刊号所収）。また、畑英理は、学校にいけなくなった子どもは、「自分の存在の承認を必要とするような、根源を揺るがすもののように見える」不安を感じ、その親は「世間」と「子ども」の双方から問われることによって、「自分が無意識に持っていた学校を中心とする価値観をあぶり出して見せられる」ことになる、と述べている（同上）。私も、高等学校の教員として働いている間、生徒は学校に来るものだということを疑ったことはなかった。学校の存在は我々にとって自明のものとなっており、学校を中心とする価値観は広く強く共有されている。山田潤の言うように、学校は子どもが学ぶための「便宜」の一つでし

かない(98年度第2回臨床哲学研究会での講演)にもかかわらず、である。

生徒に「なぜ学校に来なければならないのか」と問われても、生徒にとって納得がいく答えを示すことはとてもできそうもない。現代を生きる我々には学んでおくべきことが色々あるだろう、と言うのがせいぜいである。それはまったくの的外れであるわけではないが、学校で行われていることの多くはそれと重なり合わない。単なる知識なら学校でなくても身につけられる。特に進学に必要な受験学力は学校よりも塾や予備校の方が能率よく身につけられる。学校に求められる最優先事項は受験学力であり、受験学力の習得に役に立たなくなった学校は卒業資格を与えてくれる機関でしかない。要出席日数ぎりぎりまで欠席して受験勉強に励む生徒を責めることはできない。最近では公立高校などでも受験学力の習得に力を入れるという形で自ら予備校化しているが、それは何も今に始まったことではなく、学校制度が始まって以来日本の学校はずっとそれを基本としてきた。荻谷剛彦によれば、日本の学校制度は、公平を建前とする受験制度によって出身階層や身分から比較的自由に新たな社会的地位つくことのできる学歴社会を現出し、そのなかで特定の階層や身分からの中立性の高い「学校文化」が成立したが、その中心にあるのが専門知識でも教養でもない受験学力

である(『大衆教育社会のゆくえ』、中公新書)。

受験学力の習得に躍起になって知的活動の基本のトレーニングがなされない「知の空洞化」も気になることではあるのだが、ここでは立ち入らない。考えてみたいのは、現場の教員が受験学力の習得だけではいけないと考えるときに前提となっている、学校は人間形成の場であるという理念である。学校は豊かな人間性を育むことが第一の使命であって学力の習得に偏ってはならないという考えは根強いが、この考えを批判する者も少なくない。長田勇は、学校で「人格」を形成するという理想を批判して、望ましい「人格」像が教員によって異なる限り、公的な場では「人格」形成に関わる指導をすることは不適切であるとし、学校は生徒の「人格」を問わない教科指導の範囲に仕事を限定すべきであると論じている(『「人間教育」物語りのパラドックス』、川島書店)。この論には、人間形成と称する教員の価値観の押しつけが学校で行なわれてきたこと、世間が学校に対して過大な要求をしてきたことに対する批判としては賛成できるが、だからといって教科指導に限定すべきであるということには必ずしもならないと思う。ある特定の価値観に無批判に基づく「徳育」ではなく、多様な価値観を前提とする規範を身につけるというレベルでの人間形成も考え得るからである。

山田潤は、社会の豊かさとは、個々人の「こんな風に生きたい」という思いを「すりあわせ、おりあわせる」こと、混沌とした同じ時空のなかで共に暮らすとき、「どこまで譲り合い、どこまで助け合い、どこまで責任を引き受けるか」にあると述べている（前掲講演）。私はこの豊かさのイメージに共感できるが、それが可能になるためには、各人が「こんな風に生きたい」という思いをもっていることを承認し、「譲り合い、助け合い、責任を引き受ける」という最低限の規範が前提となる。この意味での人間形成は公的な場に矛盾しないばかりか、むしろ公的な場で人と交流するなかでなされるべきことであろう。その場が学校である必然性はないが、学校はその場の一つではあり得ると思う。

あらためて言うまでもないことだ、戦後教育の理念としてすでに半世紀にわたって唱えられ続けてきたことだと言われるかもしれない。その通りである。個の尊重と自立した個の共同は、民主主義的教育の基本として教育基本法にも教育審議会答申にもうたわれていることである。しかし、それが学校教育において実体を伴うことはついになかった。

宮台真司は、「成熟社会」における教育の目的は個人が個人として他人を承認し承認される文化を根づかせ保つことにあると言う。「過渡的近代」から「成熟した近代」へ移行すると、人々が共有

する価値観、幸福観が不透明になり、「過渡的近代」において教育の使命だった知識や価値を伝達することが成り立たなくなる。また、家族・学校・地域共同体が空洞化し、社会的交流のなかで承認された経験のない子供たちが増える。人は他人との社会的交流のなかで肯定・承認されて自尊心や尊厳を獲得するのだから、共同体への所属を離れて人と人との承認を授受しあえるようなコミュニケーションの機会を教育のなかに人為的に保障する必要がある。これは、自己決定能力の育成のシステムをつくるということでもある。自己決定することが不可避で、かつ失敗しても受けとめることができるシステム、すなわち試行錯誤を保障して自己決定と自己責任を学ばせるシステムである。（『学校を救済せよ』、学陽書房；『＜性の自己決定＞原論』、紀伊国屋書店）この議論は自律的な市民の育成という啓蒙主義の教育理念に連なるものであり新しい味はないが、耳ざわりのいいスローガンに終わってきた自律の教育の意味するところを明確に展開したところに学ぶべき点がある。

現在の学校は、自己決定と自己責任の能力の育成からは程遠い。過剰な管理と干渉とによって、自律と責任はむしろ損なわれている。揺らいできた学校的価値を守ろうとする学校の本能、学校的価値を支えている世間のイメージ、教育を学校まかせにしている家庭

や地域の責任放棄など、いろいろな要因が考えられる。が、一つはっきりしているのは、自己決定と自己責任の能力を育成することが真剣に考えられることがあまりに少なかったということである。過剰な管理と干渉とは、学校を教員と生徒にとって息苦しい不幸な場所に行っているだけでなく、道徳性の成長にとって有害ですらある。たとえば、学校生活の隅々まで規定する校則は、許されることと許されないことを自分で考えることを妨げ、規範の存在理由を不明にする。他人に危害とならないことについては基本的に個人の自己決定が尊重されるという原理が徹底されるなら、どんなに風通しがよくなることだろう。

自律の教育については考えるべき点も多い。まず、近代の個人主義的人間観に対する批判がそのまま当てはまる。一言で言えば、人間を個々独立した理性的存在者として把握する抽象的な人間理解に対する批判である。人間のあり方を家族・地域・民族などの親密な関係において把握する共同体主義的な立場からの批判も、人間の相互的なあり方を捨象して「人」の資格を理性的に自己決定する能力のみに求める生命倫理学におけるパーソン論に対する批判も、同じ点をついている。また、教育学において「教育関係のパラドックス」として論じられてきた、啓蒙主義的な教育観のはらむ問題もある。それは、自律へと

指導するというパラドックス、あるいは自己決定を教えることはパターンリズムに他ならないというパラドックスである。これらについて、十分に論じる用意は今はない。差し当たり次のように答えることができるのみである。個人主義的人間観は確かにある意味で抽象的なものである。しかし、それは親密な人間関係のなかで成長し生活する人間の現実のあり方を無視するわけではない。特定の共同体の親密な人間関係のなかで生き共同体の価値を内面化している個人が、そうした人間関係や価値を共有しない人々との関係において最低限共有すべき、人間の在り方の一つの理念である。また、自己決定を学ぶことができるのは、他者との交流においてであり、試行錯誤を通じてであることも見落としてはならない。こうした点の詳しい検討は今後の課題としたい。

(てらだとしろう・博士後期課程)



特集：教育の臨床哲学

不登校と優等生

——学校に一生懸命通っている人たちへ——

森 芳周

昨年12月2日に、第3回臨床哲学研究会が開催された。第1回と同じ栗田、畑、寺田の3人の院生によるパネルディスカッションで、「学校の現在と不在 - 哲学の現場から〈不登校〉現象を考える」というタイトルで行われた。そのパネリストの3人の発表を終えて、討論の時間に、鷲田教授から次のような発言があった。

「この研究会ではずっと不登校ということがテーマになってきたんだけど、同じぐらいの重さで優等生論をやったほうがいいと思う。……(学校というものに対する) obsession (強迫観念) に対して、どうしようもなくなって、そこで出てくるのが不登校という行為ですね。

そういう形で出ている人はいいけれども、例えば、世でいう『おりこうさん』ですね。学校へ行くというのはフィクションであって、最終的な根拠はないんだ、ないけれども、こういう社会では

みんな学校へ行くことになっているんだということをちゃんとわかっている『おりこうさん』。でもそれをフィクションだと言ってしまうと、元も子もなくなるので、一応フィクションとして、みんなやってきたんだし、一緒に演じ尽くそうというふうに考えて『おりこうさん』になり続けている子もいる。その子にかかっている obsession というのは、不登校の子にかかっている obsession に劣らず、ものすごいものだという感じがする。……」

この発言は討論の流れから出てきたものというよりも、唐突な感じがするものだった。だけど、私には、その優等生とかおりこうさんというのは、自分のことを言っているのではないかというぐらいに共感できたし、みんなこんなことを感じながら学校に通っていたのではないかと思っていた。

しかし、後日行われた研究室のメンバーとの話し合いで、この〈優等生論

> 発言がそれほど積極的に受け入れられてはいないことがわかった。その話し合いで、「優等生というのは一体どういう人のことなのか。自分で、自分は優等生だという人はいないのではないか」というような疑問があった。たぶん、この疑問は正当なもので、優等生だったら誰でも自分が優等生だということを知られたくないし、自分が苦しんでいるなんて人に言うことはできない。自分さえ黙っていれば、うまく、何事もないように過ぎていくのなら、黙っていればいい。そして、自分がそんなことを考えているのをできる限り人に知られないようにして、学校に通い続けているのが優等生なのではないだろうか。もっと正確に言うと、自分が苦しんでいるのかどうかもわからずに、なぜなら、どうして苦しいのかもわからないから、別に苦しいとも思わずに、苦しんでいるのかもしれない。というのは、鷲田先生の発言を聞いてはじめて、あーやっぱり、苦しかったんだー、という感じがした、それがあのときの共感の中心だったからだ。

苦しい、苦しいと何度も書いてきたけれども、それを「解決すべき問題だ」とか思われて、カウンセリング風に分析されるのは、まったく望まないことで、例えば、「過剰適応だ」とかのレッテル貼り。そういった無神経さに耐えられないからこそ、口を閉ざしているのに。こうして個人の病理へと帰して

しまうことへの批判は、不登校についてのこれまでの研究会でも大きなテーマとなっていた。しかし、不登校の場合にはある程度の市民権を得ているように感じるのだが、「優等生」というのはどうだろうか。過剰適応という「診断」は、まだ、とても魅力的な解決策のように見える。しかし、それは結局は、その当人たちをさらに傷つけることになってしまっている。臨床哲学が、苦しみの現場というプンクトゥム (punctum) から始める哲学であるならば、優等生を分析・分類し、個人の病理に帰してしまうことは、それがさらに無用の苦しみを強いるということから受け入れることはできない。

優等生とか落ちこぼれとか不登校とか、そういったものは、学校の中で作られる概念であって、そのようにして学校の中で不可避的に生み出されてくる苦痛を何とかフォローしていきたい。(例えば、教室では「暗い」とか「友達が少ない」等は徹底的にマイナスのイメージを持っている。それを先生に相談しても、先生はその子に「がんばれ」としか言いようがない。こういったどうしようも問題こそが本当にobsessionとなってくる。)もし何らかのobsessionを抱えながら、口に出すこともできなくて、それでも学校に通い続けているのなら、それはほとんど虐待を受けていると言えるかもしれない。

(もりよしちか・博士前期課程)

そのキスの シーンの 嘘っぱさ

『サボタージュ』より

大北全俊

キスシーンで映画を締めくくる。なんだかそこですべてが解決したような気がする。もし、登場人物がそれまで不幸であったなら、そのキスでその人は救われたような気がする。観ている僕は、そこで、何らかの欲求が満たされる。

しかし、ヒッチコックの『サボタージュ』のキスシーンは、ごく典型的なキスシーンなのに、とても嘘っぽい。そのキスによって、物事が解決したとは思えない。それなら、その映画はとてもちぐはぐな終わり方をしているかということ、僕には、かえってとてもリアルに思えてくる。

アメリカから渡ってきて映画館を営んでいるヴァーロック氏は、副業で破壊工作員をしている。彼には年の離れた若い妻がいるのだが、彼女を家政婦が「ヴァーロック夫人」と呼ばない限り、彼らが夫婦だとは思えなかった。彼女はヴァーロック氏の副業についてなにも知らない。映画館の経営は破産寸前なのに、一家の暮らし向きはそれほど窮乏していない。それなのに、彼女はどこから金が入ってきているか疑って

いない。

映画館の隣に果物屋がある。若い刑事テッドがその店の店員になりすまし、ヴァーロック氏の動きを見張っている。何かと家のことに入り込んでくるこの若い刑事テッドを、夫人はいぶかしく思っていた。彼女には弟がいる。「あの人は弟に優しいから」。彼女が年の離れた夫のそばにいるのも、テッドと親しくなるのも、二人とも弟に対して優しいからだ。

ヴァーロック氏に対する見張りが厳しくなり、思うように破壊工作をすることができなくなる。彼は、爆弾をロンドンの中心部に置きに行くのに弟を使う。当然、弟は自分の運んでいるものが時限爆弾だとは知らない。彼自身の不注意と、雑踏の中、思うように進むことができないため、爆弾は彼を乗せたバスもろとも吹き飛ばしてしまう。

弟の死とそれを引き起こしたのが自分の夫であることを夫人は知る。ヴァーロック氏はいろいろ言い訳をする。「あのテッドさえいなければ私が爆弾を置きに行った。弟を殺したのは彼だ」。彼女は、結局夫を殺してしまうのであるが、その殺人は果たして「復讐」なのだろうか。

テッドに向かって彼女は夫のことを「無害な人よ」という。およそヴァーロック夫妻の間に性的な雰囲気はないのに、言い訳のシーンで「私たちには未来がある。望むなら子供を作ってもいい。」と、ヴァーロック氏はいう。夫人共々、観ている僕もどきっとする台詞だった。突然、生々しいものにふれる。夫人が夫を殺してしまうのをどこかで当然のことだと思いつつ、その感情はどこからくるのか。

言い換えれば、ヴァーロック氏に対する嫌悪はどこからくるのか。弟を殺したという道義的な責めを彼に負わせているのだろうか。実のところ、爆発のシーンは絶妙で、爆発時刻までの切迫感とは対照的に、肝心な爆発はまるで石が転がるように起こってしまう。だから、本当に弟が死んでしまったのか、そのことの意味することは何か、はっきりしないまま、軽いショック状態のままヴァーロック氏の言い訳を聞く。彼に対する嫌悪感は、「子供を作ってもいい」というその台詞が喚起する、それまで予想していなかったその夫婦の性的なイメージ、年が離れたその夫婦のセックスのグロテスクさ、そのあたりからくるのかも知れない。その性的な嫌悪感には何ら根拠はない。それにも関わらず、微妙に、弟殺しという道義的な責めがその嫌悪感を覆い隠し正当化する。ヴァーロック氏に対する殺意は、「誰が殺した」という責任論からくるものではなく、かすかな落ち着きを見せる夫人が料理をよそっているとき、ヴァーロック氏がぼやく「またキャベツを焦がしている」というその台詞、その口臭からくる気がする。そうして、彼らの唯一の肉体的接触は、夫人によって、ヴァーロック氏の腹部にナイフが刺されることによってなされる。

このようなどっちつかずな気持ちの時に、テッドが入ってくる。彼はずいぶん前からあからさまに夫人に好意を寄せているのだが、「君の痛みは僕の痛みだ」と口説き、投げやりな彼女に「弟を亡くして生きる目的をなくしたのか」と詰め寄る姿がヴァーロック氏と重なる。夫人は、経済的に、誰か男性に「面倒」を觀てもらうほか

はないことが自明のことになっている。キスは夫人の方から誘われる。弟を殺され、自ら夫殺しまでして憔悴しきった彼女は被害者であり、その彼女を支えるテッドの存在、そして彼とのキスは、被害者救済の物語、「理想的な」男女関係の成立のように見える。でも、ヴァーロック氏に対する嫌悪が道義的なものに収まりきらないために、夫人と二人の男との関係の間には、「観たい」セックスと「観たくない」セックスの違いしかないように思えてくる。ヴァーロック氏の破壊工作に夫人は本当に無実だと言い切れるのか。彼が年老いていたというだけで、僕は、彼をセックスから排除してはいなかっただろうか。

そのキスシーンは嘘っぽい。というよりも、そのキスが「理想的」であることや、物事を解決するというキスのもつイメージそのものが嘘っぽい。だからそのキスが嘘っぽい分、そのキスシーンはリアルだ。

< 映画情報 >

『サボタージュ; SABOTAGE』

1936年 イギリス映画 76分

制作：マイケル・バルコン

監督：アルフレッド・ヒッチコック

音楽：ルイ・レヴィ

原作：ジョセフ・コンラッド「諜報部員」

脚本：チャールズ・ベネット

出演：シルヴィア・シドニー、オスカー・ホモルカ
デズモンド・テスター、ジョン・ローダー

実はこの映画は、キスシーンで終わるのではない。「笑い」ながら夫人の殺人は隠蔽される。観終わって、ある奇妙なシーンが印象に残っている。水族館で、通りすがりのカップルの会話で、男「牡蠣の栄養価は高いんだ。産卵の後、雌は性転換する。」
女「当然よ。」

(おおきたたけとし・博士後期課程)

昨年12月に創刊された『臨床哲学のメチエ』は、今後季刊として年に4回発行していくことになった。前号はちょうど「冬の号」にあたり、本号は「春の号」となる。

当研究室では98年度中に計3回の研究会を開き、いずれも「不登校」を中心テーマとした教育について問題を集中的に論じた。(教育に関する研究会は次年度も継続

習を行い、「傾聴」(お年寄りの話にひたすら耳を傾けることでケアを行う方法)を試みた。お年寄りに限らず、誰かの話を聴いて、「ああよかった」と話をした人も聴いた人も思えるときがある。今後こうした実践を通じて、「聴くことの意味」を方法や理論という枠組みを越えて臨床哲学的に深めることが当面の課題である。次号でその成果を発表する予定である。

臨床哲学的空間

する予定。)本号は、前号に引き続き「教育の臨床哲学」を特集として組み、これまでの取り組みの成果を部分的ながら発表することになった。第1回研究会の参加者からの声、第2回研究会の山田さんの講演を掲載したほか、第3回研究会にて討論された内容にもとづいて大学院生の寺田さんと森さんとに文章を寄せていただいた。

一方、臨床哲学の講義・演習の方では、「ケアとは何か」を核となるテーマとして、看護論、介護論、他者論、共感論、家族療法など様々な角度からの検討を行った。なかでも村田久行さん(「傾聴ボランティア」の実践)や信田さよ子さん(「アクション・アプローチ」)をお招きしてそれぞれのテーマについてお話していただき、活発な議論を行うことができた。

また医療研究グループは、「ニューライフガラシア」にて2回目のボランティア実

本号の最後に掲載したのは、「セクシュアリティに臨む哲学」と題する研究会にて、大学院生大北さんが提出した文書である。当研究会はまだ準備段階の活動を続けており、小規模ながら映画会や討論会を通じて、研究会の進め方を模索している。映画を議論の題材とするのは、単にセクシュアリティをテーマにした作品を批評・分析したりするためではない。むしろ、ジェンダーやセクシュアリティに関する振り・イメージを映像や映画を通して身につけてゆく、その過程を“語り合う”ことを重視している。研究会への積極的な参加を期待する。(編集者)

次回(通算第15回目)

臨床哲学研究会のお知らせ

講師：浜田寿美男氏

テーマ：生きるかたちを伝える場としての学校

とき：4月17日午後1時半より

ところ：大阪大学待兼山会館会議室

臨床哲学のメチエ Vol.2 1999 春の号

編集：本間直樹

協力：堀江剛、高橋綾、森芳周、PowerMacG3

大阪大学文学部 臨床哲学・倫理学研究室

560-0043 大阪府豊中市待兼山 1-5

homma@let.osaka-u.ac.jp

<http://bun70.osaka-u.ac.jp/>